

# 小島貞二コレクション所蔵 明治期刊行相撲書籍研究 —— Wrestlers and Wrestling in Japan (W. K. Burton, J. Inouye) について

安宅 望(立命館大学文学研究科 博士課程後期課程)

E-mail [gr0465vr@ed.ritsumei.ac.jp](mailto:gr0465vr@ed.ritsumei.ac.jp)

## 要旨

立命館大学アート・リサーチセンター(以下 ARC と表記)小島貞二コレクションの相撲古書籍の内、特に稀少と思われる本について筆者独自の視点で掘り下げ、その書籍の歴史的意義を考察する。W. K. Burton と J. Inouye 著作の英文写真集『Wrestlers and Wrestling in Japan』(邦題:日本の力士と相撲(図1))である。Burton による序文と Inouye による相撲についての解説、そして Burton と盟友鹿島清兵衛が動きのある相撲の一瞬を捉えるために試行錯誤して撮影した写真が収められている。明治中期の最先端写真技術によって遺された力士の姿が貴重である。

## abstract

The author's unique perspective delves into a particularly rare book from the Kojima Teiji Collection of the Ritsumeikan University Art Research Center (hereafter referred to as ARC) and examines the historical significance of the book. "Wrestlers and Wrestling in Japan" by W. K. Burton and J. Inouye contains a foreword by Burton, a commentary on sumo by Inouye, and photographs by Burton and his friend Seibei Kashima. Burton and his ally, Seibei Kashima, worked through a trial-and-error process to capture the moment of a sumo wrestler in motion. The images of sumo wrestlers preserved by cutting-edge photographic technology of the mid-Meiji period are valuable.

## 1. はじめに

著名な相撲史家であった小島貞二(1919~2003)は、若き日に羽海部屋の力士として旧両国国技館の土俵に立ち、引退後は相撲記者として雑誌等に健筆をふるった<sup>1)</sup>。また演芸関係の記者としても活躍した。戦後は相撲史家及び演芸評論家として多くの著作を残した。

小島が収集した相撲関連の資料は江戸時代から平成までの相撲番付、そして古書籍や手形、揮毫などであった。氏の没後、ARC ではご遺族から資料の寄託を受けて、デジタル写真撮影を行った<sup>2)</sup>。しかし、デジタル化された画像は蓄積されたものの、その整備は進んでいなかった。

筆者は2020年より、それらデジタル画像のアーカイブ化に取り組んだ。番付については興行の年月、興行場所、興行人など番付から読み取れる情報をメタデータとして付与した。すべての番付にメタデータを付与した後で、この番付の画像データと斎藤月岑著『武江年表』<sup>3)</sup>相撲記事とをリンクさせて《相撲番付と『武江年表』

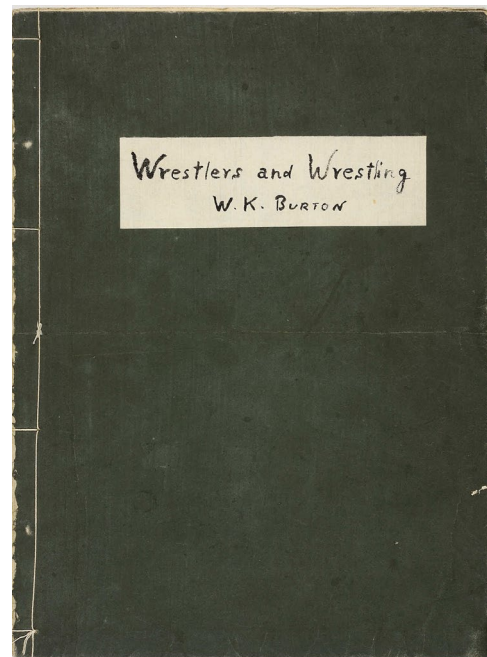


図1: Wrestlers and Wrestling in Japan 表紙  
『小島本』ARC 古典籍データベースより([koiBK01-0001](#))

から見る勸進大相撲史」というデジタル展示を制作した。そして2021年7月にARCのバーチャル・インスティテュート内に「相撲デジタル研究所」を立ち上げ、そのデジタル展示を一般公開した<sup>4)</sup>。

本稿では、小島貞二コレクションの中から明治時代中期に出版された英文の写真集『Wrestlers and Wrestling in Japan』を取り上げ、その歴史的意味を論じたい。後述するように、その出版には明治初中期の文化シーンで活躍した人々が関わっていること、また現在は市場に出ることも滅多になく、そのため研究されることもほとんどなかった書籍である<sup>5)</sup>。

## 2. 『Wrestlers and Wrestling in Japan』について

W. K. Burton. J. Inouye 『Wrestlers and Wrestling in Japan』 PUBLISHED BY K. OGAWA<sup>6)</sup>は明治28年(1895)に出版された英文の写真集である<sup>7)</sup>(以下この本を指す場合は『小島本』と表記)。邦題は『日本の力士と相撲』という。

著者のWilliam Kinninmond Burton(1856～1899)はスコットランド、エディンバラ出身の水道技術者であり、上下水道の技術指導者として招聘され明治20年(1887)に来日した。帝国大学工科大学で初めて衛生工学の講座を持ち、多くの水道技術者を育てた功績により、日本の上下水道の父と呼ばれる。また写真技術にも詳しく、日本における写真技術の向上に貢献した。当時からバルトンの名で知られた<sup>8)</sup>。

J. Inouyeとは明治期の英語教育の先駆者であった井上十吉(1862～1929)のことである。井上十吉は阿波藩士の子息として生まれ、明治6年(1873)に若年ながらイギリスに留学し冶金学を修めた。明治16年(1883)に帰国後は英語教師として多くの学校に奉職し、また英和辞典、和英辞典の編纂も行った。日本文化の海外紹介にも力を尽くし、「仮名手本忠臣蔵」の英訳なども行った。日本文化に通暁し、しかも英語でそれを表現できる当時としては稀有な人材であった<sup>9)</sup>。

出版者のK. OGAWAとは、日本の写真家の草分けである小川一真(1860～1929)である。この書籍が出版された頃、小川は東京市京橋区日吉町に日本で最初のコロタイプ印刷工場である小川写真製版所を設立した。この写真集はまさにその工場の成果である<sup>10)</sup>。

明治中期の写真技術を牽引したバルトンと小川一真、そして英語による日本文化の海外発信を目論んでいた井上十吉、そして写真撮影を手伝った富豪写真家鹿島清兵衛など<sup>11)</sup>、『Wrestlers and Wrestling in Japan』は時代の最先端を走っていた文明開化の先兵たちによる写真集である。

『小島本』の表紙は深緑の紙を使用し、その中央上方に「Wrestlers and Wrestling」と手書きで書いた題箋が貼ってある。これは本来の表紙ではなく後補である。石井貴志「ついに発見！ 幻の写真集 バルトン氏

撮影の「日本の力士と相撲」<sup>12)</sup>に著者が入手した同書の表紙の写真が出ているが、表紙には両国橋風景が描かれている。著者所蔵本は写真で見える限り、左側を2か所リボンのようなもので平綴じにしている。国会図書館デジタルコレクションの同書の画像<sup>13)</sup>は著者所蔵本よりも状態は良いように見えるが、やはり出版当初のままの状態かは画像では判断し難い。『小島本』にはこの両国橋風景の表紙は入っておらず、左側を四つ目綴じにしている。一度バラバラになった本を和綴じに綴じ直したようである。そのため表紙の絵は失われ、新たに表紙を付け替えたのである。

ARC 古典籍ポータルデータベース内の『Wrestlers and Wrestling in Japan』第5画面<sup>14)</sup>の左下隅に小島がこの本を入手した経緯を推察できる貼り紙がある。引用すると、

三〇六 日本の力士と相撲(英文)バートン・井上  
絵入 五、五〇〇  
友愛書房 千代田区神田神保町一ノ四四  
電話 二九一 - 六三二七

とある。これは古書目録を切り抜いて貼ったものである。小島のものと思われる筆跡で「訳者 井上十吉 昭42.1.25 古書★(展力)」と書かれている。1967年の1月25日に神田神保町の友愛書房が出品したこの本を5,500円で買い求めたようである。前述の石井の文章に「これまで国内の古書店で売買された時は15～25万円と高価であった」という一文がある。1967年の5,500円を現在の価値に直すと約4.3倍となり、23,700円ほどになる<sup>15)</sup>。

『小島本』には奥付が無く、国会図書館所蔵本も奥付は無い。しかし、同書誌では明治28年(1895)に出版されたことになっている。どのような根拠で出版年が特定されたかは本の画像だけではわからない。また何時これらの写真が撮影されたのかは本文には書いていない。稀観本のため論ずべき点は多いが、以上を踏まえて、この論文では論点を3つに絞る。

- ① 写された力士について
- ② 口絵について
- ③ この本の写真史・相撲史的意義について

以上の項目でこの本の稀観たる所以を論じたい。

### 2-1. 写された力士について

この写真集に登場する相撲関係者は5人、力士が4人、行司が1人である。バルトンが書いた序文によって名前が判明するのは、横綱西ノ海嘉治郎、幕内力士大砲万右衛門、十両力士祇園山万平以上の3人である。写真は図版IからXIIまで12頁、13枚であるが、その内訳は、祇園山万平が単独で写っている写真(図2)が3枚、名前不明の力士と相撲を取っている写真が6枚、西ノ海嘉治郎の横綱姿が3枚、大砲万右衛門とバルトンが並んで写っている写真が1枚である。写真はコロタイプ製版で、彩色が施されている<sup>16)</sup>。

バルトンによる序文に、「回向院の内部(相撲会場であれ芝居小屋であれ)はどのような種類の写真撮影にも適しておらず、特に瞬間的な写真撮影には適してないのである」(拙訳)とある。そこで、小屋掛けの回向院境内の本場所の土俵を写真に撮ることを諦めて、やむを得ずバルトンの自宅の庭の花壇をつぶして土俵に見立て、そこで様々な相撲の所作と取組の実況写真を撮ることを試みた、という。バルトンは友人の鹿島清兵衛とともに自宅に力士と行司を招き、試行錯誤を重ねて写真を撮ったと推察される。

横綱西ノ海嘉治郎と後に横綱となる大砲万右衛門については写真も多く残され、プロフィールも多くの書籍に詳細に書かれている<sup>17)</sup>のでここでは言及しない。

また行司については残念ながら手がかりが無く言及すべき材料を得ることが出来なかった。この写真に撮られた相撲を取っている力士祇園山万平ともう一人の力士について調べたところを記す。

祇園山万平については、死亡記事が明治 41 年(1908)10月9日の東京日日新聞<sup>18)</sup>に出ているので、おおよそのプロフィールがわかる。その新聞記事には

年寄鏡山清太夫死す 雷権太夫門の年寄鏡山静太夫は腹膜炎にて一昨夜死去せり。

とあり、略歴が記されている。本名岡本万平、文久 3 年(1863)福岡県中津郡元長村(現在 福岡県行橋市元永町)で生まれる。明治 18 年(1885)に上京して雷(いかづち:元横綱梅ヶ谷)門下に入り、祇園山と名乗る。最高位は十両 6 枚目。明治 31 年 5 月引退して年寄鏡山清太夫を襲名。巡業中に発病し、帰京して治療に務めたが薬効なく死去したとのことである。行年 48 歳であった。



図 2: 祇園山万平 『小島本』[図版 I](#)

ARC 番付データベースで祇園山の足跡を辿ると、明治 18 年 5 月場所の番付、東二段目 61 枚目(現在で言えば東幕下 51 枚目<sup>19)</sup>)に初めて名前が見え、その後二段目の上位に進み、明治 26 年(1893)5 月場所に西二段目 10 枚目(現在の十両 10 枚目)に躍進する。つまり図 2 の祇園山の化粧廻し姿は明治 26 年 5 月以降に撮られたことになる。その後は十両の中下位を往復し、明治 30 年 1 月場所に幕下に陥落し、31 年 5 月場所に引退し、年寄鏡山清太夫を襲名した。

祇園山の人柄と土俵外の彼に対する人々の興味を伝える新聞記事がある。読売新聞<sup>20)</sup>の明治 25 年(1892)11月2日に「祇園山の女難」という記事が出ている。祇園山が巡業で留守にしていた時に女房を間男に寝取られ、2 人して家財道具一切を持って逐電したという話で、記事には「流石お心よしの祇園も憤然となり」「自体細き目を八角に見開き駆け出さんとす」などと書かれている。図 2 の祇園山も目が細く、「お心よし」などと書かれた通り、素朴な風貌である。バルトンの序文にも「力士たちは、私がこれまでに会った中で最も人柄が良く、親切な人間の一人のように思え、彼らの間に存在する気持ちの良さや、(写真撮影という)彼らが経験する仕事であり競技を楽しんでいる様子を観察するのは楽しいことだった。目の前に置かれた食べ物や飲み物を、どんな量であっても腹に収めてしまう彼らの様子は、まさに驚異的であり、最も頑丈なヨーロッパ人も羨望の念を起こしたかも知れない。(中略)彼らの行動は終始とても礼儀正しいものであった。」(拙訳)と書かれており、この新聞記事から彷彿とする祇園山の姿と重なるようである。

祇園山と対戦しているもう一人の力士については序本文文いづれにも名前が無く不明である。ただ、当時の新聞記事などを参照したところ、可能性がある力士が浮かび上がった。読売新聞<sup>21)</sup>明治 26 年 6 月 23 日と 7 月 20 日に「相撲便り」という小さな記事が出ている。6 月 23 日は「▲深川区仲町に於て興行の笹島・祇園山両関の角力は飛入勝手にて勝角力には賞品を与ふるを以て意外の好景気なり」とある。7 月 20 日は「また笹島・祇園山の一行は昨日より東海道吉原駅にて興行すると云」という記事である。いずれも関取数人でグループを組んで小さな相撲興行を行うという巡業の記事であるが、この笹島という力士はいかなる力士かを調べてみる<sup>22)</sup>と、祇園山と同門の雷部屋で同じ頃に十両で活躍した力士である。出身地は委しくわからないが、番付には「筑後 笹島林太郎」とある。祇園山と同じく福岡県の出身であるようだ。同部屋・同郷の兄弟弟子を頭に小規模な相撲集団を作り、各地を巡業して周ったのである。

笹島林太郎は幕内昇進を目前にした明治 30 年(1897)12 月関西巡業中に酒色に溺れ、幕内力士横車利三郎と 2 人で一行から脱走し、行方知れずとなった。横車は仲裁に入る人がいて師匠の許しを得て復





図 3: 笹島林太郎? (手前)『小島本』[図版VI](#)

帰したが、笹島はついに戻らなかった<sup>23)</sup>。明治31年1月場所の番付に名前があるが全休し、翌場所には名前が消えた。写真の中で祇園山と相対する力士の豪放磊落な風貌(図3)は、期待されながら破天荒な行いで出世をふいにした笹島林太郎と重なるような気がする。

もとより推測に過ぎないが、この気心の知れた2人の十両力士は師匠雷(元横綱梅ヶ谷)の命により、バルトンの企てに参画することになったのではないだろうか。横綱梅ヶ谷は横綱免許を受けて明治天皇の御前で、伊藤博文公から拝領した三つ揃いの化粧廻しを締めて土俵入りを披露したこともある明治相撲界の大立者<sup>24)</sup>であった。雷親方は政財界にも顔が広く、鹿島清兵衛とも懇意だった可能性がある。その縁で弟子2人の派遣を引き受けたのだろう。

横綱、大関となった力士ならともかく、祇園山のように十両力士で終わった力士の写真が名前と共に残ったのは大変珍しい。力士の古写真は写真創成期から数多く残され、現在でも見ることが出来るが、写っている力士の名前が判明するものは少ない。明治後期に絵葉書として売り出されたものは当然ながら写真に名前が伴っているが、風俗写真や土産物の一環として撮られたものは被写体が力士と分かればよいので、名前を伴っているものはほとんど無い。当時の人には自明であった力士の名前も、今の我々では名前を特定することは容易ではない。その意味でも祇園山の写真は貴重である。祇園山万平は年寄鏡山として相撲協会に残ったので、死亡時に新聞記事となった。一方、笹島林太郎は脱走したまま相撲界から去っていった。しか

し彼らは当時の最先端の写真技術によって、はつらつとした力士姿を永久に残すことができた。

## 2-2. 口絵について

口絵(ARC 古典籍ポータルデータベース内の『Wrestlers and Wrestling in Japan』3頁、図4)は両国回向院境内での本場所風景ともいべき相撲場の様子の色刷りで描かれている。絵師の名前は画には書かれていないが、バルトンの序文により Mr. S. Okakura という絵師によって描かれたことがわかる。Mr. S. Okakura とは、岡倉天心の甥である岡倉覚平(号:秋水 1868~1950)と考えて間違いないだろう。岡倉秋水は狩野芳崖の門下で、東京美術学校の1期生であった。現在皇居前広場にある楠木正成像の図案を制作したのが岡倉秋水である(造像は高村光雲)。明治23年(1890)秋水22歳の時であった。写真集が制作された明治26~28年頃は、日本画家として活躍する一方で女子高等師範学校(お茶の水女子大学の前身)の毛筆画教員でもあった。明治27年(1894)4月に同学校を依願退職してからは画家として立ったが、明治29年(1896)12月、学習院助教授となり初等科・中等科で日本画を教えた。秋水は岡倉天心門下の横山大観、下村観山などと同年代であるが、画風は伝統的な狩野派に近く、画家というよりも教育者であったようだ<sup>25)</sup>。

『小島本』が明治28年に出版されたとすると、口絵は秋水が女子高等師範学校を退職した前後に描かれたものであろう。一見伝統的な相撲場風景を描いた浮世絵にも見えるが、木版画ではなく石版画に彩色を施した絵のようである。この絵について考えてみる。

土俵上では一方の力士が河津掛けをかけようとし、相手は踏ん張って残す、という緊迫した場面が描かれ、それを多くの観衆と土俵下に控える力士たちが見守るという構図である。このような本場所風景は江戸時代以来の相撲絵の典型的な構図(図5)である。おそらく江戸時代以来の本場所風景の浮世絵を下敷きにして描かれたものであろう。しかし人物の描き方は浮世絵風の誇張した身体表現ではない。この河津掛けを仕掛ける力士の構図はモデルがある。長崎大学附属図書館幕末・明治期日本古写真グローバルデータベースに、「WRESTLING」と題する写真がある(図6)。撮影者は A. ファルサーリ(Adolfo Farsari)、アルバム名は『明治期手彩色写真アルバム(7)』<sup>26)</sup>である。これは、横浜で写真スタジオを営んでいたイタリア人写真家 A.



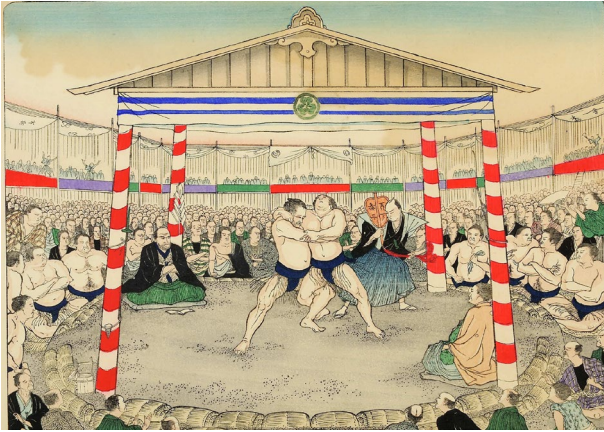


図4: Mr. S. Okakura 画 口絵『小島本』より

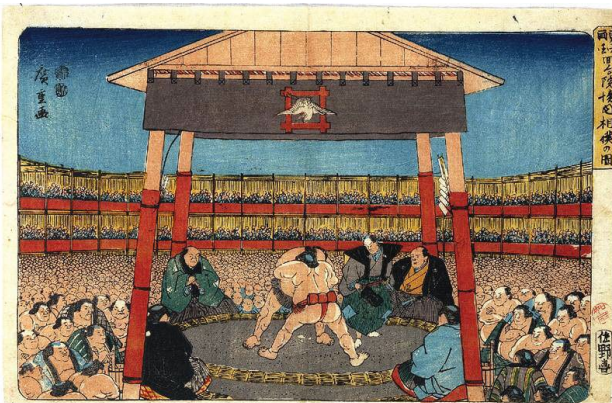


図5: 広重画「回向院境内相撲の図」  
萩美術館・浦上記念館所蔵

ファルサーリによる鶏卵紙写真で、日本人職人によって手彩色で色が付けられている。外国人観光客を対象とした土産物、いわゆる「横浜写真」である。スタジオの中にそれらしく作った土俵の上で、2人の力士が河津掛けの型を演じている。『日本相撲史』<sup>27)</sup>に「向って右・綾浪(当場所引退)左・小錦」とキャプションがついてこの写真が掲載されている<sup>28)</sup>。写真のモデルとなった綾浪は明治26年5月場所限りで引退したが、元気だったのは明治25年頃で、相手の小錦はそのとき東の大関であった。A. ファルサーリがこの写真を撮影した時期は明示されていないが、被写体の力士の活躍時期から考えて、明治25~26年頃と推定できる。

秋水がバルトンから口絵の制作を依頼された時、既にこの写真は、土産物として市場に出回っていたと考えられる。回向院境内の相撲場に出向き実景をスケッチする時間が取れなかったのか、秋水は場内風景を昔の浮世絵を下敷きに描き、土俵上の力士は写真を参照して口絵を描いたのであった。

Mr. S. Okakuraなる絵師が岡倉覚平(秋水)であることは当時の状況からみて間違いないところではある。しかし、狩野芳崖門下で旧派の日本画の俊英であった秋水にしてはこの口絵はずいぶん雑に描かれていると筆者は感じる。土俵の広さと力士のバランスの悪さ、本来4人いるはずの検査役(審判員)が2人しか描か



図6:A. ファルサーリ「WRESTLING」長崎大学附属図書館所蔵

れていないこと。四本柱が土俵の内側に描かれていることなど、秋水が相撲を実際に観ていないことがわかると同時に、下敷きにした浮世絵自体もよく見えていないようだ。彼が相撲に興味が無いことも明らかである。なお、バルトンの序文によると秋水は表紙の両国橋風景も描いているが、『小島本』には欠落しており、筆者も実見していないので、その絵についての言及は避ける<sup>29)</sup>。

### 3. この本の写真史・相撲史的意義について

『小島本』に登場する人物は、まず企画者であり撮影者であり監修者であるバルトン、撮影協力者(或いは真の仕掛け人か)である鹿島清兵衛、出版者である小川一真、いずれも明治の写真史を語る時に欠くことの出来ない名前である。また、本文の執筆を担当した井上十吉は明治の英語教育者の草分けであり、英和・和英の辞書編纂を行った文化人であった。以上の人物については数多くの関連著書があり、筆者が敢えて屋上屋を架する必要はない。また前述したように被写体であった力士たちの内、横綱西ノ海嘉治郎と撮影当時は幕内力士であったが、明治34年(1901)4月に横綱となった大砲万右衛門についても同様である。明治期を代表する横綱力士について書かれた文章は数多い<sup>30)</sup>。

筆者がここで明らかにしたのは、写真史・文化史的側面から見れば些末な部分である今は忘れられた十両力士であり口絵の典拠であった。それらを踏まえてこの



『小島本』の写真史・相撲史的意義について述べる。バルトンが序文に書いたように、彼と鹿島清兵衛がもっぱら関心を持ったのは、当時の写真技術を持っていか「一瞬を捉える」か、であった。序文によると

実際に相撲を取っている写真などは、力士が一種の反り技や投げ技を決めようとしている場面を表そうとしたのだが、決定的と思われる瞬間にプレート（？）を露光させ、その瞬間を捕らえるまでに何度も何度も操作を繰り返しているのである。（拙訳）

当時の社会の中で、所謂スポーツ写真として素早い動きの中で決定的瞬間を撮影しようと考えたとき、一番身近な題材が相撲であったと考えられる。しかし、前述したように回向院境内の本場所の土俵を撮影するのは難しく、やむを得ずバルトン邸の庭で撮影に至ったのであった。その一瞬を捉える試みは成功したといえるのであろうか。

従来から、相撲浮世絵は図 5 にあるように土俵上の取り組みを描くことはあっても、勝負のついた瞬間を描くことは無かった。勸進相撲は人気稼業であり、上位力士には必ず大名がパトロンにつき、また裕福な町人が後援者となった。そのような状況で数多く売り出される相撲浮世絵では、勝ち負けがはっきりわかる状態を絵にした作品は慣習的に制作されてこなかった。幕末から明治にかけて写された古写真も基本的には同じで、図 6 のように技をかける瞬間を写すことはあっても、勝負の決まった瞬間を写したものは無い。しかし、相撲の醍醐味は鮮やかに技が決まり勝負のついた瞬間にあることは間違いない。その緊迫した瞬間を絵にすることが出来ない相撲浮世絵は根本的なジレンマを抱えていたと言えよう。

バルトンの写真を見ると、二つの点でこの相撲浮世絵が持っていたジレンマを乗り越えようとしているのがわかる。一つは、スタジオではなく屋外で写真を撮ること、いずれ本場所の土俵を撮影する試金石としてのことである。当時、回向院境内の本場所は晴天興行であり、屋根のない小屋掛けの興行であった。国技館のような常設館が出来たのは明治 42 年(1909)である。二つ目は、まさに勝負のつく瞬間を捉えようとしたことである。図 3・7 とともに勝負のつく一瞬前を捉えている。やや生硬さは残るものの技が決まった一瞬を撮影出来ている。恐らく何枚か撮った写真の中で、最も勝負の緊張感が表現されたものを選んだと思われる。バルトンも鹿島清兵衛も十分満足したとは言えなかったろうが、序文の最後に

ネガはすべて、出版社によって忠実にコロタイプで再現されている。写真の複製は、印刷インクがある限りずっと永久に見ることができよう。（拙訳）

とあるので、その出来栄と今後の見通しについてある程度の手ごたえと自信を持っていたことが伺われる。

井上十吉が書いた当時の相撲界についての情報は独自に調査したと思われる。内容は、力士を抱え興行



図 7:『小島本』[図版VII](#) 後方で撮影するのはバルトンか

を統率する相撲協会の組織について、どのようにして力士・行司になるか。また興行における年寄・力士・行司それぞれの収入と分配について委しく書いている。本場所の土俵については、水を付けたり、塩を撒いたりする意味、力士の所作やどのように勝ち負けを決するか、などを詳細に書いている。

土屋喜敬「幕末から明治初期に來日した外国人が見た相撲」<sup>31)</sup>によると、当時開国した日本に來た外国人の多くが相撲見物に出かけている。それは回向院境内の本場所だけではなく、地方で行われた巡業も含まれている。相撲を見物し、力士と遭遇した外国人が一樣に不思議に思ったのが日本人は肉を食べないのに何故力士は巨大なたくましい肉体を持っているのかということであった。事実、初めて力士を目の当たりにしたバルトンは、大砲万右衛門の巨大さ、横綱西ノ海の頑健な身体に驚嘆している<sup>32)</sup>。それと力士という身分が武士に次いで高いことであった。また、土俵での所作や仕切り、勝負のルールなどにも興味を持っている。実際に勝負が始まるまでの長い仕切りを退屈に思ったり、唸り声をあげて激しくぶつかり、時には鼻血を出したり擦りむいて血まみれになって相撲を取る姿に若干野蛮な印象を感じている。

いずれも現代でも初めて相撲を見る外国人が、素朴に疑問に思うことを当時來日した外国人も思ったのである。井上十吉の記述はそのような素朴な疑問に出来る限り丁寧に応えようとしている。少しでも日本独自の競技である相撲を理解してもらおうと苦心して取材して書いたものと想像される。

井上十吉は代々藩主が相撲好きで、多くの力士を抱えていたことで相撲藩と言われた阿波藩の出身であり、彼自身もかなり相撲好きであったと思われる。來日した外国人が見たまま感じたままを多少差別的に書き記したのに対して、井上は日本人として相撲の立場をよく理解し、込み入った内情も含めて英語で主張できる人材であった。その意味でも、彼の書いた解説は当時の相撲界の組織や興行を客観的に知る手がかりと



図8:『小島本』図版Ⅻ バルトンと大砲万右衛門

なる。当時明治の中頃の社会で、一つの興行体について、起源・歴史には多少伝説が混じっているにしても、これほど具体的に詳細に書いたものは無かったのではないだろうか。『日本相撲史』中巻に「角舩仲間申合規則改正」「東京大角力協会申合規約制定」というものが掲載されている<sup>33)</sup>。井上十吉は、このような書面を見せてもらいつつ、年寄や行司から話を聞きながら記事を書いたのだろう。

以上のような理由で、井上の書いた相撲の解説は信頼性があり、明治中期の相撲界の諸事情を現在に伝える史料となり得る。『Wrestlers and Wrestling in Japan』は彼によって文章にも写真と同様、国際的にも通用する価値を見出すことが出来るのである。

## おわりに

日本で最初の映画撮影は、明治 32 年(1899)の九代目市川團十郎と五代目尾上菊五郎による「紅葉狩」である。実はその翌年、明治 33 年(1900)に相撲の映画が撮影された。「大相撲の活動写真」と名付けられたそれは、「映像で見る明治の日本」というサイトでいつでも見ることができる<sup>34)</sup>。バルトンや鹿島清兵衛がこだわった一瞬の動きを捉える画像は、数年後にあっさりとして映画という媒体によって乗り越えられてしまった。このころになると、勝負の瞬間を描かない中立的な相撲浮世絵は廃れてしまい、もっぱら新聞でも勝負に拘った記事を掲載し、画家に勝負の瞬間を描かせて掲載した<sup>35)</sup>。回向院境内の本場所の勝負を写真に撮る技術は未だ確立されていなかった。

相撲の実況写真が新聞に出るようになったのは大正時代になってからで、大正 7 年(1918)1 月 16 日付東京朝日新聞 5 頁の「大角力 5 日目 三杉磯と常ノ花の同体で倒れた刹那」と題された写真が最も早いものと思われる。翌年大正 8 年 5 月 11 日の東京朝日新聞 5 頁には「大相撲活動写真 朝潮と大門岩 仕切より勝敗に至るまで」という連続コマ割り写真が初めて登場する。この時期から写真で勝敗の一瞬を捉えることが当たり前になっていく。バルトンや鹿島清兵衛の時代から実に 25 年も経ってのことであった。

以上述べてきたことから『Wrestlers and Wrestling in Japan』は明治の写真史・相撲史の中で、もっと積極的に評価されるべき書籍であると筆者は考えている。相撲という競技をどう表象していくか、浮世絵版画から写真、さらに映画と変遷していく過程については、さらに調査を進め、いずれ改めて論じてみたい。

## [注]

- 1) 小島貞二著『大相撲意外史』(千人社、1983)の巻末にある「わがふんどしかつ記」によると、氏は愛知県豊橋市の出身。旧制豊橋中学を卒業後、上京し漫画家修行をしていたところ、生来の長身により昭和 13 年(1938)5 月、出羽海部屋にスカウトされ力士となった。昭和 17 年(1942)5 月場所引退した。最高位は西序二段 2 枚目であった。元々漫画家であったため力士稼業と並行して「大須猛三(おすもうさん)」というペンネームで漫画・雑文を雑誌に書いていた。
- 2) 小島貞二のコレクションは相撲番付が寛延 2 年(1749)から平成 18 年(2006)まで 1,004 枚(重複あり)。古書籍や手形など紙資料が 41 件。以上が ARC に寄託されデジタル写真撮影を行った。
- 3) 参照したのは金子光晴校訂、平凡社東洋文庫本、1982 年版である。
- 4) 相撲デジタル研究所  
<https://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/vm/sumo/>
- 5) 『Wrestlers and Wrestling in Japan』は ARC のデータベース《ARC 古典籍ポータルデータベース》、あるいは、バーチャル・インスティテュート「相撲デジタル研究所」内の X 相撲資料 DB にある《小島貞二コレクション・相撲古文献検索閲覧システム》で書名検索すれば、全頁の画像を閲覧することができ、筆者による翻刻・翻訳を読むことができる。
- 6) ARC 古典籍ポータルデータベース資料番号：  
[kojBK01-0001](https://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/vm/sumo/kojBK01-0001)
- 7) 『小島本』には刊記がなく、国会図書館デジタルコレクションの書誌に 1895 年刊とある。
- 8) この部分の記述は稲場紀久雄『バルトン先生、明治の日本を駆ける!』(平凡社、2016)による。
- 9) この部分の記述は大村喜吉「井上十吉研究序説」(日本英学史研究会研究報告 25、pp. 1-9、



- 1965)、川内有子「武士道ブームと英訳『仮名手本忠臣蔵』(『アート・リサーチ』vol.17、pp. 45 - 52、2017)による。
- 10) この部分の記述は岡塚章子『帝国の写真師 小川一真』(国書刊行会、2022)による。
- 11) 鹿島清兵衛(1866~1924)は写真大尽と異名をとった明治中期の写真界のパトロンというべき快男子であった。酒問屋鹿島屋新川店の八代目としてその財産を惜しみなく写真道楽につき込んだ。後にあまりの放蕩により鹿島屋から手切れ金を渡され追われた。その全盛時代の風貌は森鷗外の小説『百物語』、零落した晩年の風貌は白洲正子のエッセイ「遊鬼 鷗外「百物語」後日譚」に書かれている。
- 12) 『水道公論』10月号、pp. 84 - 88、2003
- 13) 国会図書館デジタルコレクション  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1675453/1/1>
- 14) ARC 古典籍ポータルデータベース  
<https://www.dh-jac.net/db1/books/kojBK01-0001/portal/4/>
- 15) 日本銀行 HP「昭和 40 年の 1 万円を、今のお金に換算するとどの位になりますか?」より計算(2023年9月26日現在)  
<https://www.boj.or.jp/about/education/oshiete/history/j12.htm>  
『小島本』は表紙を綴じ直した不完全な本であるが、当時としても掘り出し物であったと思われる。
- 16) 『小島本』と国会図書館本は写真に彩色が施されているが、石井所蔵本は白黒のままであるという。
- 17) 酒井忠正『日本相撲史』中巻(ベースボールマガジン社、1964) p.61 と p.146 に横綱西ノ海の略歴が、同書 p.120 と p.218 に横綱大砲万右衛門の略歴が記されている。また小島貞二『大相撲名力士 100 選』(秋田書店、1972)にも p.123 に西ノ海、p.134 に大砲の小伝がある。
- 18) 毎日新聞のデータベース「毎策」の紙面検索より 1908 年 10 月 9 日朝刊 6 頁中段左に記事あり。
- 19) 当時の番付は現在のように 2 段目の十両と幕下は表記の区別は無く、上位 10 枚目までを開取として、11 枚目以下を幕下力士とした。
- 20) 読売新聞のデータベース「ヨミダス歴史館」より 1892 年 11 月 2 日朝刊 3 頁 2 段目に記事あり。内容は「幕下にて人気のある祇園山万平は」、回向院境内の茶店を譲り受けて福本と名づけ、店の業務一切を女房に任せて、本人は相撲に専心していた。ところが、祇園山が年がら年中巡業で留守にしている間に女房は「間夫間男仕放題」という有様だった。境内でアムストン曲馬団が興行しているとき、女房はその出方の金太郎という男と懇ろになった。祇園山が巡業で留守にしているのを幸い、興行が終わったと同時に女房と金太郎は「ありったけの家内諸道具を掻き集めいざくともなく逐電し」てしまった。さすがに隣人たちも見捨ててはおけずに祇園山に知らせてやると、驚いて巡業地から駆けつけてきた。「流石お心よしの祇園も憤然となり
- 栄螺の如き鉄拳を握り詰めおのれ兩人何処に隠るゝとも探し出して八つ裂きになさんと自体細き目を八角に見開き駆け出さんと」した。しかしよくよく思い返して無念の胸をなでおろして、再び巡業地に帰っていった、という話である。
- 21) 読売新聞のデータベース「ヨミダス歴史館」より 1893 年 6 月 23 日、及び 7 月 20 日の記事。
- 22) ARC 番付ポータルデータベースを使って明治 28 年前後の相撲番付を調べ、並行して『日本相撲史』中巻の同時期の記事を探索して、いつから番付に登場し、いつ消えていったかを調べた。
- 23) 朝日新聞のデータベース「朝日新聞クロスリサーチ」より 1897 年 12 月 17 日付朝刊 5 頁 5 段目に「●横車と笹島」という脱走の記事があり、1898 年 1 月 26 日付朝刊 5 頁 2 段目の「角舩雑俎」に横車は或る人の仲裁により復帰が叶ったが、笹島は依然行方不明であることが報じられている。
- 24) 15 代横綱初代梅ヶ谷藤太郎(1845~1928)は福岡県出身で明治初期に最強と言われた力士だった。明治 17 年(1884)3月10日芝延遼館で明治天皇の天覧相撲があり、伊藤公拝領の三つ揃の化粧廻しをつけて土俵入を行った。この天覧相撲をきっかけにして幕末以来低迷していた相撲界に活気が戻り、相撲人気が復活した。ちょうど天覧歌舞伎により歌舞伎人気が復活したのと軌を一にする。梅ヶ谷は明治 18 年(1885)に引退、年寄雷を襲名して多くの力士を育てた。明治後期の横綱二代目梅ヶ谷は養子であった。また相撲協会の取締として相撲興隆に力を尽くし、明治 42 年(1909)に完成した旧両国国技館もその功績の一つであった。昭和 3 年(1928)死去。83 歳の長寿であった。
- 25) この部分の記述は、岡倉日出夫「岡倉秋水伝」(『五浦論叢』第 16 号、pp. 17 - 39、2009)による。
- 26) 目録番号 6777 長崎大学附属図書館利用許可番号 2023-46
- 27) 中巻の p.124 明治 26 年 5 月場所の項
- 28) この写真と同じものが『写真図説相撲百年の歴史』(講談社、1970) p.111 に「名人大関荒岩を相手に河津掛けの型を演ずる小錦(左)」というキャプションで載っている。この写真は明治 25~26 年頃に撮られたものである。この右側の力士は荒岩ではありえない。荒岩が幕内に入ったのは明治 30 年(1897)1月場所、明治 25 年頃はまだ大阪相撲の下位力士であったからだ。岡倉秋水の絵をきっかけに上記書のキャプションの誤りを発見することとなった。
- 29) 国会図書館デジタルコレクションに公開されている『Wrestlers and wrestling in Japan』で表紙絵を見ることができる。  
<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1675453/1/5>
- 30) バルトンについては、稲場紀久雄『バルトン先生、明治の日本を駆ける!』(平凡社、2016)に伝記及び年譜が出ている。鹿島清兵衛については、飯沢耕太郎「写真大尽といわれた男 鹿



- 島清兵衛」(『芸術新潮』41(4) pp. 97-105、1990)にその生涯が簡潔に書かれている。小川一真については岡塚章子『帝国の写真師 小川一真』という研究書がある。西ノ海、大砲については注17参照。
- 31) 『相撲博物館紀要』14, pp. 1-23 (2016)
- 32) バルトンは序文において西ノ海について「特別に背が高いわけではない。身長は5フィート10インチくらいだろうか。しかし、多少お腹が出ているにもかかわらず、彼の身体は鉄のように硬い筋肉の塊である」また大砲について「世界のどこにいても巨大な男として見られるだろう。」と書いている。
- 33) 酒井忠正『日本相撲史』中巻のp.97に「東京大角力協会申合規約制定」という記事がある。明治19年(1886)制定の「角舩仲間申合規約」を明治22年(1889)に改正して、相撲会所と言っていた組織を東京大角力協会と名を改めた。1条から67条に及ぶ規約は、役員並びに選挙方法、取締、検査役、部長の職務、給金制度、番付作成法、年寄数の制限(88名)、益金の配当法など広範囲に亘って内部規約を定めている。
- 34) 「映像でみる明治の日本」の中から「大相撲の活動写真」。映画のタイトルは「明治二十八年の両国大相撲」とあるが、もちろん回向院境内の本場所の土俵ではなく、野外に天幕を張って土俵を設えて、そこで力士が次々と相撲を取るという映画である。しかし、登場する力士の活躍時期から「明治二十八年」は誤りで、明治33年五月場所以降に撮影されたと考えられる。登場力士も幕内力士ばかりでなく十両・幕下の力士も登場する。  
<https://meiji.filmarchives.jp/works/03.html>
- 35) 相撲記者栗島狭衣著『相撲百話』(朝日新聞社、1940)。同書pp.281-285に「相撲挿画の復活へ」という相撲挿絵について回顧した一節がある。それによると、新聞紙上に勝負の瞬間を挿絵で表現した記事が載るのは明治33年頃から。時事新報が北沢楽天を起用したのを嚆矢とする。その後、各新聞社が相撲好きの日本画家などを回向院境内の本場所に派遣して、それぞれの勝負を絵に描いて勝負付けとともに紙上に掲載した。起用された画家は万朝報が徳永柳洲、読売新聞は鏑木清方、報知新聞は本田穆堂、都新聞は新井芳宗、朝日新聞は鱒崎英朋などであった。他にも谷洗馬、平福百穂、近藤紫雲といった画家も参入したという。「全くかうなると相撲の気運は、記述文と写生画に煽られて、日に月に隆昌を来たし相撲愛好者の興趣は、津々として尽きざるの思いがあった」と書いている。(国会図書館デジタルコレクション)  
<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1230619/1/155>

本稿のために参照した URL の最終閲覧日は2023年10月29日である。